所信表明
（社会背景の課題認識とその対策）

市長の所信表明

① 昭和35年の約5万人だった人口は、若い方々の転入により、15年間で約25万人に急増した。
そのため、短期間に急ピッチで都市インフラが整備されていった。

⇩ 40年、50年が経過し・・・

② 人口のボリュームゾーンが70歳代、80歳代を迎えることになる。
短期間に集中的に整備された公共施設・インフラが一斉に耐用年数を超えてくる。

⇩ その結果・・・

③ 「市民サービスの危機」
シルバー世代を中心とした介護関連のサービスを始め、社会保障コストが大幅に増加し、市の経営を圧迫する可能性が高い。
「公共施設・都市インフラの危機」
公共建築物の老朽化が進んでいる。
今後20年間で公共建築物・インフラを合わせ、2200億円を大幅に超える財源が必要となるなど、都市インフラの維持コストの増加が見込まれている。

⇩ その改善には・・・

④ 今後、安定的な行財政運営を行い、充実した市民サービスを継続的に行うには、人口の年齢構成のバランスの補正が不可欠。

⇩ 具体的には・・・

⑤ 70歳代以上の人口のボリュームゾーンのカウンターパートとなる20代～30代の子育て世代をターゲットとした、新住民の「移植」を積極的に行うことが必要。

⇩ どのようにして・・・

⑥ 京阪沿線には新住民を誘引するための新たなまちづくりの余地が十分残されていない。
そこで、もう一つの沿線である、JR学研都市線の星田駅から忍ケ丘駅に至る寝屋川公園駅を中心とした地域に「グランドデザイン」を戦略的に描き、都市計画などを緩和変更し、周辺の物価を上昇させ、大手デベロッパーにとって魅力的なまち・土地とする。それによって、民間資本を活用して望むまちづくりを進める。
子育て世代を誘引するソフト対策として、小中一貫校をメインとする。更に、様々な検証をした上で、子育て世代向けに「大胆な予算の投入」を行う。

板東と共通する課題認識

実は、16年前に初当選した時の一般質問が「公共施設・インフラのライフサイクルコスト」でした。
新市長の「公共施設・都市インフラの危機」と同様の主旨、つまり、都市インフラの維持コストを平準化させることで、将来危機を回避することを目的として質問をしました。

また、過去3回の選挙では、人口の年齢構成の変化に着目し、そこから派生する諸課題解決に向けた対策を公約として掲げておりますし、それに沿った議会活動を行ってまいりました。

つまり、市長の所信表明での①～④までの、社会背景としての課題認識は、大筋では共通しています。
ただ、③の「市民サービスの危機」は、現在の税制制度や地方財政制度などを前提としていることから、違う考え方を持っています。

板東の考える対策

現在の社会背景から予測できる課題に対する解決策として提案してきたのが、
1.「寝屋川市のふるさと化」
2.「全員参加型社会」
という2つのフレーズであり、10年以上掲げている公約です。

1. は、今の住民の子々孫々が、脈々と寝屋川市に住んでいただくことを目的にしたものです。
親・子・孫という世代が住むことにより、自ずと年齢バランスが修正できることと、定住化＝ふるさと化が図れるものと考えております。
「寝屋川市で住み続ける」理由として最も多いアンケート結果は、「本市で生まれたから」「長く住んでいるから」です。どの自治体もおおよそ同じだと思います。様々な視点で提案している政策です。

2. は、高齢世代の人口が増加することで派生する課題を想像すると、行政サービスだけでは市民生活に支障がでると考え、対応可能な「社会づくり」として取り組んでいる政策です。
地域協働協議会などの組織論と、取り組み内容について提案しています。

1と2は、単身世帯や高齢者だけの世帯の増加による課題にも対応でき、個人・行政・市の「持続可能性を高める」と考えております。

新たな事業が提案されました

６月議会では、約２４億５８００万円の補正予算が計上されました。一部ご紹介いたします。

■高齢者の運転免許自主返納　　４８９万円

最近になって特に報道の機会が増えた、高齢者による交通死亡事故。
「交通白書」によると、昨年１年間では７５歳以上のドライバーの過失による死亡事故件数は、７５歳未満の２．４倍になっています。

日常生活の上で、車が必要不可欠となっている場合もあるかも知れません。ただ、その活用度合いや運転技術・運動能力などを客観的に見直す機会を持つことも必要だと思います。
また、行政や公共交通機関などの取り組みによる、移動手段の確保が急務だということは、言うまでもありません。

今議会では、運転免許の自主返納を促すきっかけづくりとして、更に、免許がなくなったとしても外出を促すことを目的に、令和元年１０月１日以降に返納した高齢者を対象に、タクシークーポン券又は交通ＩＣカードを交付する予算が計上されました。
　　６５歳以上７５歳未満は　２，０００円分
　　７５歳以上は　　５，０００円分

毎年、本市では１００名程度の方が免許を自主返納されているそうですが、予算には７５０人を対象とした額が計上されています。
交付の申請には、「申請による運転免許の取り消し通知書」が必要になります。

■香里園地域の水路の浄化　　６１００万円

八坂松屋線以東の香里園地域の水路は、水源を持たない、勾配のない水路です。
元来、農業用として整備されていた水路を、開発に伴って雨水対策に流用されたと聞き及んでいます。

これまで悪臭や景観面の問題もあり、私も含め議会からも指摘・改善の声が繰り返されていました。

今議会では、香里園駅西側交通広場内で地下水を汲み上げる施設整備の予算が計上されました。
この対策により、香里南之町から寿町の東部分を南下し、田井西公園北側に通じる水路に水が流れることになります。毎分２トン程度で、水深５～７㎝程度になるとのことですが、水環境の改善が期待できます。
まだ、対象地域の一部ですが、一歩前進です。
ただ、予算額は、ポンプアップの施設を整備するとしても、井戸を掘ってきた他の事業と比べ、高く感じています。

■打上川治水緑地に常設の駐車場　　５０３０万円

治水緑地が公園としてより一層活用できることや、市の収入を増やすことを目的に、コインパーキングの設置を提案していました。
当時の寝屋川市の回答としては次のような内容でした。
「大阪府の施設であり、府の考えは『治水施設の性質上、課題が多い』という理由から、できない。」
そのようなことから、これまでイベントの時や団体利用の時などに限定された駐車場活用となっている経緯があります。

その後、大阪城公園で導入されているパークマネジメントというように、大阪府の考え方も柔軟になり、市からの働きかけと相まって、コインパーキングとしての利用の道が開けました。
治水緑地の一部の地域（これまで、イベント時に駐車場として使われていた場所）を１５０台程度の駐車場とする予定です。

あくまで治水施設なので、大雨時には雨水が流入することもあります。利用の仕方・利用者への周知を始め、心配される諸課題を解消できるよう万全の準備が必要な取り組みです。
収入は、治水緑地に対する管理のために使うことが条件となりそうです。

■萱島駅の耐震補強工事　　２４７０万円

このような公共交通機関の施設は、既に耐震化されているものとばかり思っていました。

今回対象となる工事場所は、萱島駅駅舎（西側半分）と事務所として利用されていた高架の一部です。柱部分を補強するということで、寝屋川市域にある柱４３本が対象となります。
耐震補強工事を行う京阪電気鉄道に補助をするという性質のもので、補助の対象となる工事費１億４８２０万円の１/６が寝屋川市の負担となります。
工事は、８月～来年２月までを予定されています。

■歩道橋の修繕箇所の変更

年度当初は、池田本町第２歩道橋（保健福祉センター前）の修繕を予定しており、予算審議もそれを前提に行われました。
しかしながら、その後に決定した国の補助金の影響により、池田東町歩道橋（スーパー玉出前）に変更となるることが、報告としてありました。

ねやがわ雑学

国別の外国人登録数

近年、本市でも外国人の姿を見かける機会が多くなったのではないでしょうか。それも、観光客ではなく、市内に住み、働いていると思われる外国人を。

１０年間の各年ごとの推移を見ると、総数にこそ大きな変化はありませんが、個々の国では、特徴が見て取れます。
右の表は１０年前との比較です。韓国・朝鮮、ベトナム、ブラジルで大きく数字が動いています。

これら住民基本台帳に登録されていない外国人もいますし、改正出入国管理法によって今後増加することも想定されます。
改めて、共生社会に対する取り組みの重要性を肌で感じています。

	２０１７年	２００７年
総　数	２，８７８人	２，９４６人
韓国・朝鮮	１，１９８人	１，５６６人
中国	７７４人	７２３人
ベトナム	２４８人	２４人
フィリピン	１８０人	１７３人
ブラジル	５１人	１２８人
ペルー	４４人	５１人
タイ	３７人	３８人
アメリカ	３１人	４５人
ボリビア	２７人	４４人

シリーズ ねやがわ史

万葉集と寝屋川市

「令和」で一躍脚光を浴びた「万葉集」。
４００年余りの間に４５００首を超える歌を集めたとされています。
大阪府内には歌に関係のあると思われる場所に「万葉歌碑」が設置されていることもあり、碑を見ることもあるのではないでしょうか。

「河内女の　手染めの糸を　繰り返し　片糸にあれど　絶えむと思へや」

「洗い衣　取替河の　川淀の　淀まむ心　思ひかねつも」

「天なるや　神楽良の小野に　茅草刈り　草刈りばかり　鵠を立つも」

この３首は、「寝屋川市誌」に本市に縁のある歌かも知ないと、取り上げられている歌です。
少々強引な感もあるように感じてはいますが、現在のような行政区の概念を取り除いてイメージすると、受け入れることもできそうな歌でもあります。

歌の背景が明確でない分だけ、「本市の古であれば…」とその描写が広がり、万葉集との距離が近づく思いにさせてくれます。